

# 神にできないうちはない

日本基督教団  
塚口教会  
〒661-0012  
尼崎市南塚口町  
2丁目34-3  
電話 06-6429-3019

## 神にできないうちはない

ルカによる福音書 一章二六―三八節

沖村裕史

週報をご覧になって、えつ、なぜ？ そう思われた方は、決して少なくないでしょう。春四月の、しかも、レントからイースターに向かうこの季節に読むには、いかにもそぐわない、季節感が違う、と訝しく思われたことでしょう。テレビ番組「プレバト！」に出演する俳人夏井いつきによる「俳句の才能査定ランキング」であれば、「才能なし」ということになるのかも知れません。しかし、このレントの季節に、受胎告知と呼ばれるこの箇所を読むことは、かえっておさわししいことです。なぜなら、御子誕生の中にもう既に、御子のご生涯の、何よりも御子の十字架の意味をはっきりと読み取ることが出来るからです。この福音書がわたしたちに告げていることは、ただ「キリストの十字架を前にして、自らを省みて、泣け、悔い改めよ」ということであると、E・シユバイツァーが語ったことの意味がここにはっきりと示されていると思われるからです。

「六か月目に」という言葉で語り始められています。これは、祭司ザカリヤの妻エリサベトが、洗礼者ヨハネを身ごもったその時から、六か月目ということ。エリサベトのお腹が目立ち始めた時、洗礼者ヨハネの誕生を告げた天使ガブリエルが、今度マリヤに、御子イエスを身ごもることを告げるために遣わされます。ルカは、この御子イエスの誕生と洗礼者ヨハネの誕生の出来事を、織物の縦横二本の糸のように描いています。そのことは、ふたつの場面がびつたりと重なることから分かります。天使が現れます。彼らは恐れや不安、戸惑いを覚えます。その彼らに天使は「恐れるな」と声をかけ、そして子どもの誕生を告げます。それに対して「どうしてそんなことがあり得るだろうか」という疑いを告白します。そのとき天使が告げたみ言葉は「人間には不可能に思えることも、神の御心ならば必ず実現する」でした。これは、ルカが意識して整えたことです。そのようにして、際立つように語られていることは、天の使いの最後のみ言葉、「神にできないことはない」です。

つまり、御子イエスの誕生において起こった驚くべき出来事は、毎年繰り返して耳にしているため当たり前のように思えても、実は全く当たり前ではない、紛れもなく神の出来事である、ということ。それどころか、イエス・キリストの誕生から十字架まで、そのご生涯において起こっている出来事の全てが「神の出来事である」ということです。それを人間の側から申し上げるなら、イエス・キリストにおいて示される神の出来事によって初めて、わたしたちは神を、神の愛を知ることが出来るのだ、ということ。イエス・キリストにおいて示される神の出来事は、神の恵みの、神の愛の「目に見えるしるし」である、ということ。そのしるしのために、神がヨハネの両親として選び用いられたのは、エルサレム神殿に仕える年老いた祭司ザカリヤとその妻エリサベトでしたが、御子イエスを生む母として選ばれ用いられたのは、ガリラヤのナザレに住む、マリヤという少女でした。ガリラヤという田舎の、ナザレという村に住む、特に家柄がよいわけでもない、何の変哲もない、どこにでもいるような娘です。西洋絵画に見るような、若いけれども成熟した、美しくも清楚な女性というのではありません。聖書には、美しいとも清楚とも書かれませんが、神は他でもない、何者でもない一人の幼い娘をこそ、救い主イエス・キリストの母として選び、用いられたのだ、ということ。この、どこにでもいるような平凡な者をこそ選ばれ、用いられたことこそ、神の恵みの、神の愛の「目に見えるしるし」でした。

そして神の恵みの、神の愛の「目に見えるしるし」である出来事の締め括りとして語られた言葉が、三七節でした。「神にできないことは何一つない。神にできないことはない、つまり神は全能である、ということです。わたしたちは、当然のことと、この言葉を理解するかもしれません。しかし、原文の直訳はこうです。「なぜなら、神においては、全ての言葉は不可能ではないから」。神がすべてを実現する、というのではありません。神の言葉はすべて実現する、現実のものとなる。実現することのない神の言葉はない、と言っているのです。事実、マリヤが受け止めたのも、そのことでした。だからこそマリヤは、この天使のみ言葉を受けて、こう応えます。「お言葉どおり、この身に成りますように」。「あなたのお言葉がこの身に実現しますように」と応えているのです。

マリヤがここで信じて受け入れたのは、わたしたちが、普段口にし、当然だと思っているような、神は何でもできる、全知全能のお方といった、決まりきった信仰箇条の言葉ではありません。神がその御心を示され、臨在され、働いてくださるのは、語られた言葉によるのだ、ということ。漠としたわたしたちの感覚や思いではなく、イエス・キリストにおいて神は語られ、自らを示してくださるので、ということ。神は全能のお方。この言葉をわたしたちは、実に自分勝手に用いてはいけません。自分の望みや欲望を、全能の神にかぶせて祈り願います。自分の思い通りにならなければ、神の全能を疑います。そんなわたしたちの思いや願いとはかかわりなく、ただみ言葉において、わたしたちは神と出会い、その御心を、その御力を、その愛を示されるのだ、ということ。「神の全能」ということの、本当の意味は、そこにごあります。「神にできないことは何一つない」とは、わたしたち人間の思いではなく、わたしたちを愛し、救おうとされる神のみ言葉を、救いの約束を受け入れ、信頼して、どのような時にも、どれほどの苦難の中にあつても、愛の神のみ手にお委ねしようとするのです。そして何よりも、わたしたちにそうすることができるとすれば、それは、そのみ言葉がただ一度の決定的な出来事として、御子イエスの十字架と復活において現実の出来事となり、神の恵みの、神の愛の「目に見える」しるしとしてわたしたちに示されたからでした。

(二〇一七年四月二日、受難節第五主日礼拝)